



「平城宮跡発掘調査部」50年

1952年に設立された奈良文化財研究所は、1954年の通称「一条通」での発掘調査を皮切りに平城宮跡の発掘にたずさわることとなり、1959年からは平城宮跡の発掘調査を継続的に実施するようになります。そうしたなか、平城宮跡西南隅に電車検車区が計画されたことに端を発する保存運動が高まり、1963年には平城宮跡全域の史跡としての保存と国費による土地買い上げ並びに継続的な発掘調査の方針が決定、平城宮跡発掘調査部が発足したのです。以来50年、2006年には組織改編にともない都城発掘調査部（平城地区）と名称を変更しましたが、継続的に平城宮跡の発掘調査とそれにもとづく各種研究を進めてきました。

膨大な研究成果のうち、平城宮の解明という点でとりわけ大きな意味を持つと思われる二点について紹介しておきましょう。まず、第一次大極殿について。明治時代以降の平城宮研究では、地上に盛土状の痕跡をとどめていた第二次（東区）大極殿跡が平城宮の大極殿であると考えられていました。ところが、現在の第一次（中央区）大極殿院地区の調査で巨大な建造物の基壇の痕跡が検出され、これこそが平城遷都直後に造営された大極殿であり、東のものは奈良時代後半のそれであることがあきらかにされたのです。その後、考古学・歴史学・建築史学等の緻密な研究を経て、第一次大極殿が復原されたこと



第一次大極殿院西楼の発掘遺構

は皆様もご存じのとおりです。もう一つは、平城宮跡東張り出し部の「発見」です。国道24号線のバイパスが平城宮跡東辺沿いに計画されたことにともなう事前発掘調査で、平城宮の東辺に沿って南北に貫通するはずの大路が南面する平城宮の門により途切れていったことがわかりました。正方形と考えられていた平城宮が東に張り出しを持つことがあきらかになりました。くわえて、その張り出し部東南隅では奈良時代の庭園の遺構が良好な状態で見つかり、東院庭園と名付けられたこの庭園も庭園史学や建築史学等の研究にもとづき復原整備されました。

更に、古代史の解明という点では木簡の研究もきわめて重要な成果です。平城宮跡で木簡がはじめて発見されたのは、平城宮跡発掘調査部発足前の1961年。その後、宮跡内の各所や平城京内の長屋王邸跡等で多数の木簡が出土し、その解読にもとづく研究は奈良時代の政治や生活の実態をあきらかにし、文字通り古代史を書き替える資料となったのです。

私達の調査研究の特色は、考古学をはじめとした様々な分野の研究者が共同で発掘調査をおこない、多様な観点から研究をおこなうことです。更に、中国や韓国の研究機関とも緊密な協力関係を構築し、東アジアの視点も大切にしています。このような研究スタイルをもとに、今後も奈良時代の歴史の実像をあきらかにし、その成果を様々な形で皆様にお伝えしていきたいと考えています。

（副所長 小野 健吉）



東院庭園の発掘遺構